

神宮式年遷宮の建築的意義について

黒田 龍二

序

神宮の式年遷宮について建築史的な視点から考えるというのが、筆者に与えられた課題である。二十年毎の式年遷宮という一見膨大な浪費が、何故多くの艱難辛苦を乗り越えて六十二回も続いてきたのか。このことに関連して、次のような象徴的なことがあった。明治時代に入って、神宮の整備と改革が進む中で、神宮の建築を鉄筋コンクリート造の恒久的なものに変更するという案が出たことがある。このような意見が出るのは、式年遷宮の意義が説明されていないからではないだろうか。それは約一世紀以前のことであるが、現在、式年遷宮の意義が明瞭に示されているのかというと、そうではない。式年遷宮の意義が明瞭ではない理由は何だろうか。神宮は少なくとも奈良時代以後廃絶したことはないし、膨大な史料を残してもいるから、どこ

かにその理由を書いたものがあるのかも知れない。しかし、私は式年遷宮の意義に関する説明がないようにみえるのは、なにかの目的があつて式年遷宮制度があるというよりは、式年遷宮そのものが目的だからだと考えている。そうだとすると、先の単純な疑問は、なぜ式年遷宮が目的なのか、という問題になろう。

神宮の式年遷宮は、社殿群と神宝を二十年ごとに新たに作り替え、御霊代を古い社殿から新しい社殿に移すことである。このために神宮では、主要な社殿群の敷地として西殿地、東殿地がある。内宮・外宮の御正宮の殿地は、内宮が東西約五二m、南北約一二六m、外宮が東西約六九m、南北約一一七mの広大なものである。⁽¹⁾常の状態では、どちらかに社殿が建っており、もう一方は空地である。神社は数多くあるが、このような事例はない。世界でも聖地の最奥部のすぐ横に大きな空地があるという事例はないだろう。

これをどのように思うのか、異文化の人に聞いて見たいところである。

大半の日本人は、それが式年遷宮のための空地なのだという説明をきけば納得してしまい、これがどれほど珍しいことなのかを認識する人は少ないだろう。日本の木造建築文化のなかでは、建替えはそれほど珍しいことではないからである。しかし、そのための広大な敷地が恒常的に準備されているというのは、尋常ではない。一方、寺院や城郭、書院などは恒久的な建物として作られるのであって、日本の建築文化全体として建替えが常態化しているわけではない。建替えが常態であったのは、一部の神社建築である。

一、建築史学の先行研究

——福山敏男、稲垣栄三、太田博太郎——

ここでは神社本殿の建替えつまり造替が一定の年限を設定しているが、殿地が動くわけではない場合を式年造替といふことにする。⁽²⁾ 神宮のような方式でなくても御神体が仮殿へ動座することを遷宮といふので、殿地が動かない場合も式年遷宮といふからである。東西の殿地を正殿が行き来する式年遷宮は神宮だけで、ほかは式年造替である。式年造替制をもっていたのは一部の神社で、著名な大社では古くは香取、鹿島、住吉⁽³⁾、現今では春日大社、上下賀茂神社、

住吉大社がよく知られた事例である。近代になって、古社寺保存、文化財保存に関する法律が整備され、これらの神社は戦前には国宝、戦後は文化財保護法のもとで国宝、重要文化財となっているため、全てを作り替える造替はしないこととなり、屋根葺替、部分修理をもって造替としている。

神社において造替が制度化されて行われる理由については、従来、日本の民俗信仰と関連付ける説明が有力である。民俗信仰のなかには、祭のたびごとに神を迎える仮設の施設をつくり、祭りが終わると撤去するという方式がある。福山敏男は、これを古い時代における神社建築の成立の事情に押し及ぼして、それまでの仮設社殿が常設社殿となり、神社建築が成立したのちもある程度旧慣を残し、定期的な造替の習慣となったといふ。⁽⁴⁾

稲垣栄三は、神宮とその祭祀について深く考察した。⁽⁵⁾ 稲垣は式年遷宮制が成立する以前に常設社殿が成立しているはずであり、その時には破損すれば修理するという随破修理の慣行が先行したと考えた。その上で、次の三点との関連で式年遷宮制の成立および意義を説明しようとした。

- (1) 神は移動することによって顕現するという神幸祭の原理との関連。

- (2) 神嘗祭、新嘗祭、大嘗祭との関連。特に大嘗祭

は式年遷宮と酷似する。

(3) 歴代皇居の遷宮（歴代遷宮）との関連。

大嘗祭との類似を主張するに際しては、大嘗宮が「土間床の住居」であるのに対して、神宮正殿が高床倉庫で、性格が相反することに苦しみながらも、全体の配置が類似し、二殿並立する点に関連性を求める。その上で、稲垣は神宮とは異なる大嘗宮の建築的性格を説明するために、神宮の成立以前の状況について思考を及ぼした。大嘗宮のなかで展開される神事は、神宮成立以前の天皇の大殿で行われていた同床共殿の神事と同じだというのである。その結果、「歴代遷宮と同床共殿の慣行のもつあらゆる内容がのちに儀礼化して、神宮の式年遷宮ならびに大嘗祭として継承される」とした。

太田博太郎の考察は、式年造替という行事を神社建築全般にわたって広く検討したもので、示唆に富む見解が示されている。まず、稲垣論文が式年造替以前の随破修理の慣行を強調したのに対して、それは建築物維持管理の基本原則であって、慣行というのはふさわしくないし、神社に限ることでもない指摘した。寺院との比較においては、神社は「新しい」ことを尊ぶ点を指摘する。次に、建物が修理ないし建替えを要する耐用年限の事例を広く巧妙に検討して、神宮の式年遷宮の間隔が二十年なのは茅葺の寿命に

よると結論した。また、式年遷宮は二十年一度の大神嘗祭であるという考え方に対しては、それは『皇太神宮儀式帳』『太神宮諸雜事記』に見えず、それらで強調されているのは「新宮」に奉遷することだとする。大神嘗祭が重要であるならば、造替が遅れた時にも仮殿遷宮などで行われるはずだが、そういう事例はなく、他の神社でも神嘗祭と正遷宮とは無関係な日時に行われるという。ここでも太田が強調するのは新しい建物で祭りを行うことが要求されたという建築的な価値観である。太田の結論は、神社建築は常に新しいことが求められるのであり、「伊勢神宮の二十年式年制はこのような『新しさ』の要求と経済的な制約とを勘案しての規定であつたのだろう」となっている。

二、神宮成立以前

神宮成立以前はどうだったかという問題は稲垣が苦労した点で、戦後長く論争されてきた問題である。いまだ決着を見ていないが、筆者は二〇〇九年に発見された奈良県桜井市纏向遺跡の建築群が初期ヤマト王権の王宮であると判断される点から、仮説を立てている。発見された大型建物D及び棟持柱建物C、建物Bが初期ヤマト王権の王宮であるとすれば、神宮成立以前ならびに起源の問題は明瞭に説明がつく(図1)。

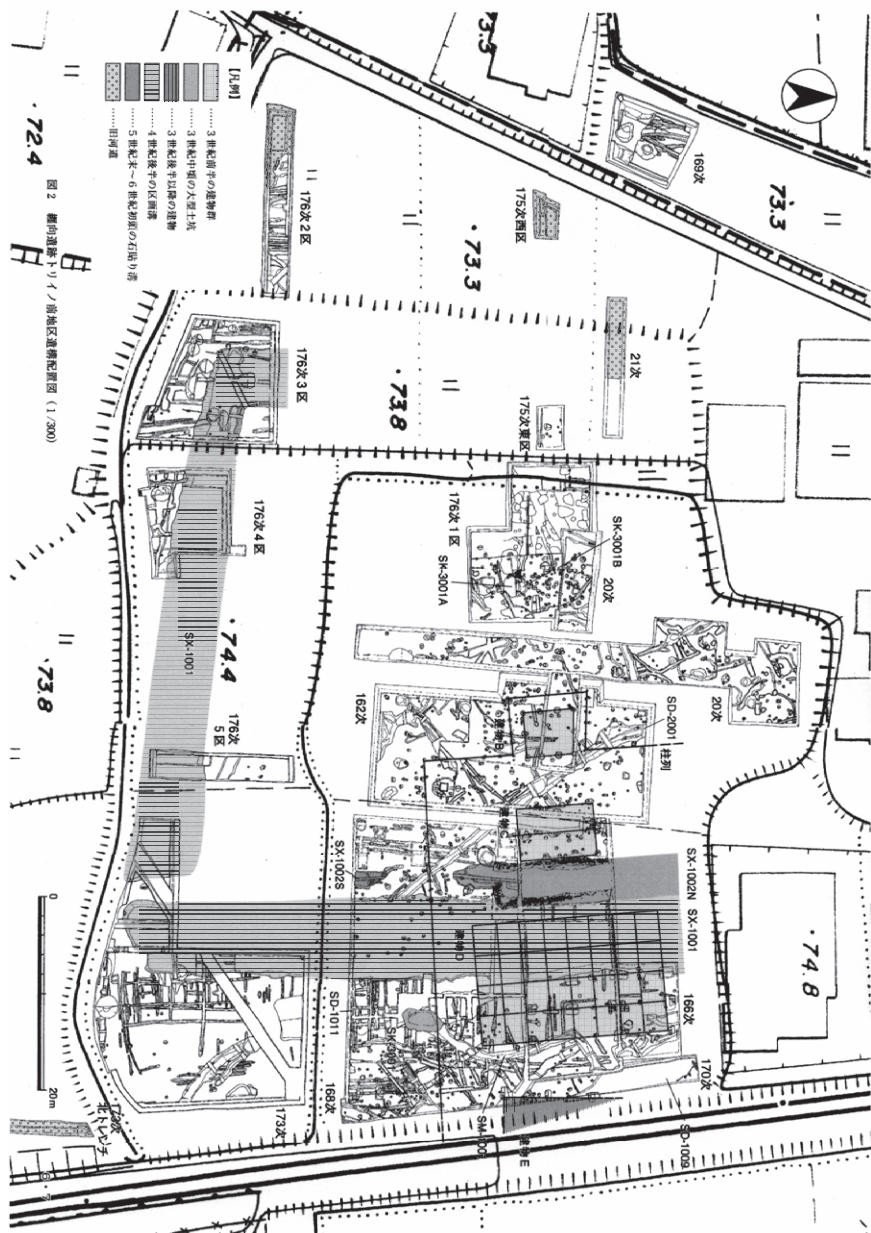


図1 纏向遺跡の建造物群配置図⁽²¹⁾

纏向遺跡の東西一直線にならぶ建築群の状態は、『日本書紀』崇神紀、『神宮雜例集』に記述のある状態と考えられる。崇神紀では宝鏡との同床共殿を畏れて、宝鏡を宮殿から出して倭笠縫邑に祀ったとしている。おなじことを『神宮雜例集』は、宮内の大庭にホコラを建てて宝鏡を祀ったと記す。纏向遺跡では、王の宮殿と見られる桁行四間、梁間四間（推定）で高床の巨大な建物Dのすぐ西に、東西の中心軸をそろえて、棟持柱をもつ桁行三間梁間一間の建物Cがある。これは『神宮雜例集』の記述に合致するとともに、建物Cは形も規模も神宮正殿とよく似ているのである。建物Dは大きい柱穴と小さい柱穴が交互に並ぶので、明瞭な高床建築と推定できる。稲垣の言う、大嘗宮で行なわれる神事は神宮成立以前に天皇が大殿で行なった同床共殿の神事と同じ、というのは間違いとはいえないが、大殿と見られる建物Dは土間床ではなく、高床建築である。王宮は三世紀前半という考古学的年代が推定されており、中心の大型建物Dは大小の柱掘形が交互に並ぶ極めて特殊な構造である。この建物Dのすぐ東では、同じ特殊な構造の建築物が発見されていて、その年代は三世紀後半から四世紀と推定されている。後者は、やや年代が降る時期の王宮の建物と考えられるが、その西側は全面的に発掘が完了しており、その王宮に付随する棟持柱建物は無い。

筆者の考えでは大型建物Dは同床共殿の祭祀が行われた御舎（大殿、みあらか）である。もともとはこの建物に奉安されていた天照大神の御霊代である宝鏡は、この段階では棟持柱建物Cに移されていた。この王宮の年代は三世紀前半である。このあと発見された三世紀後半から四世紀とみられる王宮は、棟持柱建物を伴っていない。したがって、三世紀中期から四世紀までのうちに宝鏡は伊勢に奉遷されたといえる。少なくともこの地から外に移された。

神宮正殿が棟持柱の建物である理由は、王宮で建てられた宝鏡のための宝庫が建物Cの形態すなわち棟持柱建物だったからである。神宮に宝鏡が奉遷されて以後、宝鏡に対する同床共殿時代の日常祭祀は外宮御饌殿で行われるようになったと筆者は考えている。

三、式年遷宮の始まり

それから数世紀を経て、神宮では式年遷宮が開始される。『二所大神宮例文』によると、天武天皇の宿願によって、持統天皇の四年（六九〇）に内宮、同六年（六九二）に外宮のそれぞれ第一回の式年遷宮が行なわれた。天武天皇の宿願によるという背景には、壬申の乱の戦勝祈願や斎王の再興など、天武天皇による神宮の整備があったことが推定されている。⁽⁸⁾ 天武・持統の両帝により、神宮は整備され、式

年遷宮制が定められ、そして実行された。

天武・持統朝には法体系その他の国家体制が整備され、初の恒常的な都である藤原京が造営された。すべてが恒常的に存続することを目指して構築されたのであるから、神宮の整備方針も恒常性を目指したと考えるのが自然だろう。当時、すでに飛鳥寺ほかの寺院建築が威容を誇っていたから、神宮においても中国の技術を使つた恒久的建築物が建設されてもよかつたはずである。しかし、そこでとられた方策は二十年ごとの造替であつた。稲垣はこれを大嘗祭と似たものと捉え、太田は恒常的な「新しさ」を維持するためとした。どちらも間違いではないが、それは結果論であらう。

藤原京が造営されるまでは、皇居は一代ごとに移つていた。それをあらためて都を恒久的なものとし、政治体制も強固に制度化した。すべてが新たに作り変えられていくなかで、神宮の整備方針だけが守旧的なものだつたのだろうか。少なくとも、それまで神宮では式年遷宮はなかつたのであるから、新しい方式が考えられたことは確かである。福山説の神社建築成立以前の仮設性が反映したという指摘や、稲垣説の歴代皇居が遷宮していたこととの関連の指摘は守旧的な方向性を指し示している。

筆者は、神宮の整備はそのような後ろ向きのものである

く、神宮では天皇の存在自体との類比が設定されたのではないかと考える。天皇は皇統を伝える存在であるが、一代ごとに変わる。生ける存在だからである。国はそのような天皇を中心に構築されたのであり、生ける存在としての天皇の護持は、国の護持と同じ意味をもつ。一方、神宮は皇統の根源にある宝鏡を伝える存在である。従つて、宝鏡を伝える神宮も生ける存在としての護持の方針が設定されたのであらう。殿地は東西に動くが、神宮そのものは動くことなく固定され、式年遷宮によつて、神宮は天皇と同じような生ける存在として維持されているといえる。中世に心御柱は天皇の御体と同一とみなされたことがあり、それは中世的な俗説とも言えようが、そもそも神宮正殿それ自体が天皇の御体と平行関係に位置付けられたのではないだろうか。筆者は、心御柱は正殿の建築を代表する建築材と考えている。神宮の造殿儀式の中には、御用材を採取するための二つの木本祭がある。心御柱の用材をとるための木本祭と、御船代の用材をとるための御船代祭である。御船代は御霊代の容器であるから、御神体に関連する調度の代表であり、心御柱は建築用材の代表といえるのである。⁽⁹⁾心御柱と玉体の同一視はあながち間違いでもない。

稲垣と太田が推定したことはこのような設定の結果といえるであらう。

四、式年遷宮と式年造替の違い

神宮正殿が天皇の存在と深く関わることに異論はないと思うが、同時に類比的な関係にあることは、他社の式年造替と神宮の式年遷宮との比較、および第六項の神宮祭祀と天皇祭祀の比較を通じてよくわかる。

造替制度が判明する限り伊勢神宮に次いで古い神社は先述のように、香取神宮、鹿島神宮、住吉大社（日本後記）、ついで宇佐神宮、春日大社（西宮記）である。このうち、香取神宮ではアサメ殿、春日大社では移殿に御霊代を移して本殿を造替した。春日大社の移殿は常置されている。アサメ殿、移殿は一般的にいうところの仮殿であり、他の神社でも神宮のような遷宮が行われたとは思えないので、神宮以外では仮殿を使用する式年造替であったといえよう。この方式は現在も極めて一般的で、本殿の修理や建替えに際しては御霊代を本殿から仮殿へ移す下遷宮を行い、神の留守中に本殿の工事を行い、竣工すれば仮殿から本殿へ御霊代を移す正遷宮を行う。つまり神宮以外の造替や修理では、神霊は何日かまたは何ヶ月か仮住まいになる。

これに対して神宮の式年遷宮では、御霊代は旧正殿から新正殿へと直接に移動するので、仮の状態は出現しない。仮の状態が出現することは極めて不吉であり、極力避けら

れていた。式年遷宮以外の時期に正殿が破損して修理が必要となったときは、短期で正殿の工事を終えるための準備を整えて、仮殿に御霊代を出し、一日のうちに工事を終えて正殿に戻すのが原則だった⁽¹⁰⁾。これを一宿遷宮という。神宮では原則として仮の状態は出現せず、それは天皇が不在になることがないのと同じである。

神宮に近い形は、上賀茂神社にみられる。奈良時代から平安時代はじめにかけて、上下賀茂社は都の鎮守として位置付けられ、神宮に倣って社殿を整備したと考えられる。両社は三間社流造で、身舎の規模は神宮正殿と同じ桁行三間、梁間二間で、神宮の建築と無関係ではないだろう。この二社では同形同大の建物を左右に二棟配置する。下鴨神社では本殿二棟、上賀茂神社では本殿と権殿をならべていて、神宮の新正殿が完成してから旧正殿が取り壊されるまでのあり方とよく似ている。上賀茂神社には式年の制はなかったが、特にその造替方式は神宮との比較の上で意義深いものである。上賀茂神社は東が本殿、西が権殿である。嘉元三年（一一三五）の『御遷宮日記』によれば、造替はまず権殿を建替えて、本殿のすぐ前に新しい本殿を作る。次ぎに御霊代を権殿に移して本殿を取り壊す。そして本殿の位置に新本殿を引屋して、御霊代を新本殿に移す。この権殿に御霊代を写すこと以後を二日のうちにおこなう。権

殿は仮殿とはいえ、本殿とまったく同形同大で、御神宝も揃っている。上賀茂神社がこのような不思議な形態と、造替方法をとる理由は、神宮と同じく仮の状態を極限的に短くするためであると考えられる。

五、心御柱と遷宮

神宮で重視される祭りは年三回あり、三節祭という。九月の神嘗祭と六月、十二月の月次祭である。三節祭では、勅使と斎王が神宮に参拝する昼の祭りと、深夜と明け方二度の由貴大神饌がある。由貴大神饌は正殿床下の心御柱の前に奉げられる。このことから、心御柱は神宮の御霊代と同じくらい重要なもので、神宮の神秘とされている。解釈はさまざまであるが、大きく分ければ、心御柱を神聖なヒモロギに類するもの⁽¹²⁾と考える説と、正殿の建設位置を示す定位点説のふたつとなる。この問題を考える要点は次のふたつのである。ヒモロギ説が重視するのは、日常の神饌は外宮御饌殿で奉仕するが、最も重い三節祭では心御柱の前に奉奠される点である。あたかも心御柱に神が宿っているようにみえる。定位点説をとる筆者が特に重視するのは、式年遷宮に際して旧殿の心御柱だけは撤去されずに残されることである。神聖なヒモロギを放置することがまず説明できない。さらに二十年後の造殿行事ではこの心御柱

を抜いて、直ちに新しい心御柱を立てることから具体的な正殿建設がはじまる。つまり、新正殿を旧来とまったく同じ位置に建てるために心御柱は存在するといえる。心御柱は四十年間の働きがあるが、後半の二十年間は祭祀はなく、放置されているようにみえる。しかし、この後半二〇年間の働きも重要であって、旧殿地すなわち次回の新殿地に残される点に大きな意味がある。

筆者は定位点説であるが、心御柱が定位点を示すものであれば、その前に神饌がささげられることの解釈を示す必要がある。内宮の三節祭では内宮正殿のほか、第一別宮の荒祭宮と特別な由緒のある所管社の瀧祭に由貴大神饌が捧げられ、その行事は内宮と同じとされる。このことは、江戸時代の記録に行事が詳しく記され、鎌倉時代の『皇太宮年中行事』、平安初期の『皇太神宮儀式帳』にまで遡ることができる。奈良時代から変わらずに行なわれているのである。荒祭宮での行事は正殿の床下であるが、荒祭宮には心御柱はない。心御柱は内宮、外宮の正殿にだけある。したがって、荒祭宮での由貴大神饌は、単に床下での行事なのである。さらに瀧祭には古来社殿がなく、単純な河原の祭場である。だから、瀧祭での由貴大神饌は単に露天の祭儀なのである。この二例から由貴大神饌は心御柱にささげられると解釈する必要はないといえる。神饌が心御柱の

前でささげられる理由は、そこが天照大神が伊勢に天降つ

た地点だからである。天降った地点とはつまり正殿が建てられた地点である。心御柱はまさにそれを示すものである。

床下の祭儀、心御柱に対する祭儀とみえるものは、直接天照大神に神饌をささげる露天の祭儀なのだと筆者は考へて⁽¹³⁾いる。⁽¹³⁾荒祭宮に心御柱がないのは、そもそも当初の式年遷宮の対象は内宮外宮の正殿だけだったからである。⁽¹⁴⁾

先に第二節で、纏向遺跡の棟持柱建物Cが王宮で宝鏡を納めていた宝庫であり、神宮正殿の原形であると述べたが、そこには心御柱はない。もし、正殿の祭祀に必須のものであれば纏向遺跡にあつてもよさそうなのだが、心御柱の痕跡はない。この点からも心御柱は神宮で生じたものであり、それも式年遷宮にともなつて、厳密に旧殿の位置を記憶するために設けられたものと考えられる。また心御柱が、旧殿地に残されることには、そこが二十年後の遷宮の地であることを示し、みだりに旧殿地に建物などが建てられ、侵害されることを防ぐ効果がある。心御柱は、将来の約束の地を標めているのであり、来るべき式年遷宮を視覚化しているのである。⁽¹⁵⁾また、心御柱がヒモロギという一般的なもののならば他の神社でもありそうなものだが、心御柱に類するものは古い形態の神社にはない。それは、心御柱が式年遷宮と関係の深いものであり、他の神社には式年遷宮が

ないゆえに心御柱もないのである。

六、新嘗祭・神今食と三節祭

以上のような、生ける存在としての神宮の護持という考へを基礎として、はじめて太田の新しい建築の必要性や稲垣の大嘗祭との関連性が大きな意味をもつ。特に大嘗祭との関連性は、直接に天皇との関連性を示唆している。神宮祭祀と天皇祭祀との類比について以下に述べる。

式年遷宮は神嘗祭と重ねて行われることが多く、二十年に一回の大神嘗祭であるという理解はかなり一般的なものとして⁽¹⁶⁾されている。これは今日の神宮関係者の意識でもあると推量される。このことに関する太田の反論は第一節に書いた通りだが、神嘗祭と式年遷宮は無関係ではないだろう。

神嘗祭と月次祭は三節祭と呼ばれる神宮の最も重い祭儀であり、昼に勅使、斎王の参拝があり、深夜、早暁には由貴大神饌が正殿床下で奉奠されることは前項で述べた通りである。昼の行事は朝廷ないし天皇が神宮に礼を尽くす祭儀であるのに対して、深夜、早暁の祭祀は神宮自体の祭儀である。従つて、由貴大神饌は神宮自体における意義を持つはずである。由貴大神饌と平行する天皇祭祀は新嘗祭と神今食である。新嘗祭は、神宮の神嘗祭に相当する。月次祭は神宮、宮中双方で行なわれ、神今食は宮中の月次祭の

付随行事である。新嘗祭、神今食は、天皇が直接天照大神に御饌を奉げ、自らも食する行事であり、由貴大神饌と同じ意義をもつといえる。神今食は、初見が延暦九年であるが、『二十二社註式』、『公事根源』、『高橋氏文』に靈龜二年に行われたことが見え、それ以前からの行事と考えられる¹⁷。これによって、神宮の重要祭祀が宮中の祭祀と平行関係にあることがわかる。

もう一点注目したいのは新嘗祭、神今食に付随する大殿堂祭である。大殿堂祭には恒例と臨時の二種があり、恒例は神今食、新嘗祭、大嘗祭の後に行なわれ、臨時としては皇居の遷移、斎宮斎院の卜定の後などに行なわれる。行事は、仁寿殿（四隅に玉を懸ける、米酒切木綿を殿内四隅に撒く）、紫宸殿（散米、四隅に玉を懸ける、米酒切木綿を殿内四隅に散らす）、承明門（散米）、御湯殿（四隅に玉を懸ける）、厠殿（四隅に玉を懸ける）、御厨子所（四隅に玉を懸ける）で行なわれる¹⁹。大殿堂の祝詞は天皇の御殿で読み上げられ、それは『貞観儀式』の頃には仁寿殿、『延喜式』の頃には清凉殿であったとされる。神今食、新嘗祭ともに神事の場所は神嘉殿であるから、大殿堂はそれとは関係なく天皇の居住の場を祝っている。祝詞の内容は、「今奥山に立つ木を斎部の斎斧で切取り、本末を山の神に祭り、中の間を持ち出でて、斎鋤を以って斎柱を立て……」（適宜意識、省略）とい

うような建築的内容を含む。大殿堂で建物を鎮めるのは、建物が新築されたものとして、あるいは新築されたときに遡って、建物に悪いことが起きないように鎮め、祝つていと考えられる。つまり、御殿は祝詞によって更新されると推定される。天皇の御殿は、藤原京以後は代替わりで建替えられることはなくなったが、それゆえに重要な三つの祭りに際しては太田の言うような新しい建物と同じ意識をもちこんだのではないだろうか。これが神宮では新しい方式としての式年遷宮となったのである。

むすび

本稿では二十年ごとに東西の殿地に正殿を建替える神宮の式年遷宮のみを式年遷宮とし、他の仮殿を使用する定期造替は式年造替と呼ぶ。常に式年遷宮のために広大な空地を聖地の中心部に準備している神宮のあり方は、世界的にみても極めて特殊である。

式年遷宮に関する建築史学の重要な研究としては、福山敏男、稲垣栄三、太田博太郎の論考がある。これらにおいて、社殿成立以前の原始的な神社のあり方との関連、大嘗祭・皇居の歴代遷宮との関連、神社における新しさへの要求と建築材の耐用年限との関連などが指摘されてきた。

先行研究においては、神宮の成立事情や成立以前の状況

が不分明であったが、二〇〇九年に発見された纏向遺跡の建築群が初期ヤマト王権の王宮であるとすると、そのなかの棟持柱建物Cが神宮成立以前の状況物を語る遺構として重要である。筆者は、大型建物Dは天照大神との同床共殿の祭祀が行なわれた御舎（みあらか）であり、棟持柱建物Cは、宝鏡を納めた宝庫であると考えている。宝鏡が伊勢に移される以前には、王宮内の宝庫に納められていたために、神宮正殿はそれと同じ棟持柱建物の形式をとったのである。つまり纏向遺跡の建物Cは神宮正殿の原形である。

纏向遺跡の状況から、宝鏡が伊勢に奉遷されたのは三世紀後半から四世紀と推定されるが、それから数世紀を経て、式年遷宮が開始される。天武・持統朝の新しい都の造営、強固な政治体制の建設と平行して、神宮でも新たな維持体制が構築された。それは皇統を維持する生ける存在としての天皇に合わせて、皇統の根源である宝鏡を維持する生ける存在としての神宮の設定であった。建築物の維持のため二十年は適切な周期である。これは古い時代の名残ではなく、それまでの随破修理の方法を脱して新しい式年遷宮制を敷いたときの考え方だった。

このことは式年遷宮と式年造替の違いにもよく表れている。式年造替では、仮殿に御霊代を遷して本殿を建替えるので、かなりの期間、仮の状態となる。これに対して、神

宮の式年遷宮では、仮の状態は出現しない。神宮では、一宿遷宮すなわち不慮の事故に際しても一日のうちに修理を終えるのが原則であり、仮の状態は極力回避された。これは天皇が生ける存在であり、皇統が絶間なく続くのと同じなのである。神宮にならったものと推定される上賀茂神社の造替方式も、仮の状態を極力避ける方式である。

式年遷宮に関しては、他の神社にはない心御柱も重要な意味をもっている。心御柱とは何かという問題については、ヒモロギ説と定位点説があり、筆者は定位点説である。心御柱は建てられてから二十年たつて遷宮が行われ、正殿がなくなってもそのまま残される。次回の遷宮ではこの古い心御柱を抜いて新しい心御柱を建てることから正殿の建設が始まる。ほかに何もない旧殿地に残された心御柱は、その地が次回の遷宮用地であることを示し、ほかの用途に転用されたり、建物が建てられたりすることを防いでいる。遷宮用地を標めているのであり、次回遷宮を視覚化しているのである。心御柱は神宮正殿の原形たる纏向遺跡の建物Cにはなく、神宮における式年遷宮の開始によって出現したと考えられる。心御柱は式年遷宮と共に神宮独特のものである。

皇居における重要な天皇祭祀である新嘗祭および月次祭の神今食は、神宮の三節祭すなわち神嘗祭と月次祭の由貴

大神饌と平行関係にある。皇居におけるこの三つの祭祀には大殿祭が付随する。大殿祭の祝詞は天皇の居住の場を鎮める働きがあるが、その内容は建物の建設の様子を語るものでもあり、天皇の住まいを建設段階に遡って、すなわち新しい建物として鎮めていると思われる。この点に神宮の式年遷宮と近い観念があり、また天皇ないしその容器としての皇居と神宮との類比関係もうかがわれる。

以上、神宮の式年遷宮を一段古い祭祀のあり方や民俗信仰の慣行との関連でみる見方が多いなかで、天武・持統朝における新しい思想、方式としての位置付けを試みた。式年遷宮は神宮の維持のために行われる半面、式年遷宮を行うために神宮が存在するともいえる。それが生ける神宮ということである。

注

- (1) 『神宮―第六十回神宮式年遷宮―』（小学館、昭和五十四年）所載の九〇〇分の一敷地図面を板垣で測った数値。
- (2) 式年の意味は本稿では常識的にこのように使用するが、正確な意味については岡田精司「式年」造替の制度」『古代祭祀の史的研究』塙書房、一九九二年）参照。これによれば式年の式は法令の式に記載があるということだから、延喜式に記載のないものは定期造替というほうが学問的には正しいだろう。

- (3) 『延喜式』卷三（臨時祭）。
- (4) 福山敏男「神社建築概説」『神社建築史の研究』中央公論美術出版、一九八四年）。
- (5) 稲垣栄三「式年遷宮の建築的考察」『神社建築史研究Ⅰ 稲垣栄三著作集Ⅰ』中央公論美術出版、平成十八年）。
- (6) 太田博太郎「式年造替制の調査報告」『建築史学』十八号、一九九二年）、同「式年造替制私考」『建築史学』十九号、一九九二年）。
- (7) 拙著『纏向から伊勢・出雲へ』学生社、二〇二二年）。
- (8) 福山敏男「神宮の建築に関する史的調査」造神宮使庁、昭和十五年）。
- (9) 拙著『神のやしろの曙』（『原始の造形』講談社、平成六年、『中世寺社信仰の場』思文閣出版、一九九九年）。
- (10) 中西正幸「神宮式年遷宮の歴史と祭儀」大明堂、平成七年）。
- (11) 稲垣栄三「賀茂別雷神社本殿・権殿その他社殿 解説」『日本建築史基礎資料集成二 社殿Ⅱ』中央公論美術出版、昭和四十七年）。
- (12) 牟禮仁「大嘗・遷宮と聖なるもの」皇學館大學出版部、平成十一年）。
- (13) 拙著『神のやしろの曙』（前出）。
- (14) 『太神宮諸雜事記』に天平十九年に諸別宮の二十年一度の遷宮の宣旨が出たことを記す。
- (15) 拙著『纏向から伊勢・出雲へ』学生社、二〇一一年）。
- (16) 中西正幸「神宮式年遷宮の歴史と祭儀」（前出）九頁。
- (17) 次田閔「祝詞新講」（昭和二年、明治書院）「六月月次」の項。

(18) 青木紀元『祝詞全評釈』右文書院、平成十二年。

(19) 次田閔『祝詞新講』(前出)「大殿祭」の項。

(20) (18)に同じ。

(21) 桜井市纏向学研究センター編『纏向遺跡発掘調査概要報告書―トリイノ前地区における発掘調査』(桜井市教育委員会、二〇一三年)より転載。

(神戸大学工学研究科教授)